

論文の内容の要旨

論文題目 小学校中高学年学級における学習規律と逸脱行動に関する学級経営研究

氏 名 笹屋 孝允

本研究は、小学校中高学年学級における、授業中の学習規律の成立、および学習規律からの逸脱行動への対応に関する1年間の学級経営過程を明らかにすることを目的とし、全5部8章から成る。小学校中高学年学級において教師は、自身の授業像の実現につながる児童の行動手続きを決定し、年度初めの時期に児童に指導する。行動手続きが学習規律として成立すると、教師は逸脱行動の制止に注力する。このような学級経営の前提が学習規律の成立をむしろ困難にしているとも考えられ、学級経営過程を改めて検討し逸脱行動の新たな見方を提示する必要がある。

第I部第1章では、本研究の立場と検討課題を明らかにするため、学級経営研究における学習規律と逸脱行動の見方を時系列に沿って概括した。先行研究の課題として、逸脱する児童－まわりの児童－教師の三者関係を想定しまわりの児童の学習規律学習過程を検討すること、並立する2つの教室談話空間を逸脱行動が接続する過程を検討すること、短期間で行われる逸脱行動への対応の連続によって構成される長期的な学級経営過程を検討することの3点を指摘した。社会認知理論、談話空間理論、学校経営理論の理論枠組みに依拠し、先行研究の知見と合わせ想定される学級経営過程のモデルを構築した上で、逸脱行動を端緒とした学習規律の学習過程を検討すること、逸脱行動への対応が教室談話や学級経営過程に与える影響を検討すること、また、逸脱行動を感知する条件となる教師や児童の学習規律認識の特徴を分析する質問紙調査を行うことを、本研究の課題に設定した。

第2章では、本研究の方法を検討した。教師と児童の学習規律認識を分析するために質問紙調査を、逸脱行動への対応の過程を分析するために授業の参与観察と相互行為分析を、それぞれの方法として定めた。分析する事例は、普段は無意識化されている学習規律が意識化され明示化される、教師やまわりの児童による注意場面に焦点を当てることとした。

第Ⅱ部第3章では、6年生3学級A・B・C学級を研究協力者とし、教師と児童の1年間の学習規律認識の推移を分析し、また、教師－児童間の学習規律認識の相違と児童の学校適応感や学級風土の関係を検討するために、質問紙調査を行った。予備調査により教師と児童たちがすでに成立を認識している学習規律を分析し、学習規律の重要度認識を調査する質問紙を作成した。逸脱行動の感知につながる教師－児童間の認識の相違について、学期に1回ずつ計3回の質問紙調査を行った。各学級の予備調査結果について学習規律を4から5カテゴリにボトムアップで集約し、各カテゴリから項目を選定して学習規律の重要度認識を調査した。1標本のウィルコクソン符号付き順位検定により教師－児童間の認識の相違を確認したところ、各学級、各カテゴリについて1年間のいずれかもしくは全ての回で教師－児童間の学習規律重要度認識の相違が存在していたことが示され、各学級で学習規律の学習の端緒となる逸脱行動が教師によって感知される状況が年間を通して見られることが示唆された。また、重要度認識の相違と学校適応感、学級風土の各因子との関係を見るために、学校適応感質問紙及び、学級風土質問紙の調査結果から相関関係を分析した。スピアマンの順位相関係数を算出した結果、学習規律の重要度認識と、学習志向性や自己開示に関する因子との間に1年間のいずれかもしくは全ての回で、正の相関が見られた。児童の学習規律重要度認識と学校適応感や学級風土との間の関係が示され、児童の学習規律重要度認識向上への支援の必要性が示唆された。

第Ⅲ部では、逸脱行動への教師やまわりの児童の対応により、児童が学習規律の学習をどのように展開するのか、その過程を検討するために Bandura の社会認知理論および自己調整学習理論に依拠し、行動、環境、認知の3要素に着目した相互行為分析を行った。

第4章では、逸脱行動へのまわりの児童による対応を通じた学習規律の学習過程を検討した。4年生学級15時間の授業のうち4事例から、逸脱行動による不利益を明示化して説明する情報勢力を発揮した対応をまわりの児童が行うことで、まわりの児童が学習規律の重要性を再認識する学習過程があること、逸脱行動をとる児童が自身の行動についての判断、特に評価の基準を変化させ自己調整過程を向社会的に変化させる学習を展開する過程が解釈的に分析された。また、別場面にて以前と同様の逸脱行動をとる児童とまわりの児

童の主体が替わることで、その判断が新たに共有されていく学習過程があると分析された。逸脱行動を端緒としたまわりの児童の学習規律の学習過程が明らかとなり、両者の双方向の関係による学習規律の学習過程が成立することが示された。

第5章では、逸脱行動への教師による対応の特徴を検討した。5年生学級17時間の授業のうち2事例に着目し、逸脱する児童と教師の相互行為を解釈的に分析した。その結果、教師は相互行為の中で逸脱行動をとる児童の自己調整過程を推察し、その判断を受容できるならば教師が学習規律の基準を妥協し、逸脱行動と見なさないようにする過程があると分析された。逸脱行動をとる児童にその行動をとる理由を説明させること、説明を解釈し逸脱行動をとる児童の認知を教師が分析できるようになることが、逸脱行動への対応の条件として示された。第Ⅲ部にて、逸脱行動を端緒として、逸脱行動をとる児童のみならず、まわりの児童や教師も学習規律を学習する場合があること、三者間の双方向の影響関係が成立することが示された。

第Ⅳ部では、逸脱行動への対応が教室談話や学級経営過程に与える影響を検討するために、逸脱行動への対応によってもたらされる教室談話の変化及び、教師の授業像の変化を検討した。

第6章では、教室の談話の変化を検討するために、Gutierrezら(1995)による「第三の空間」の概念に依拠し、その変化の過程と、条件となる教師の対応の特徴を検討した。6年生D学級36時間の授業のうち3事例に着目し、教室談話及び児童の私語内容を解釈的に分析した。その結果、教師が私語の内容を尋ね、それを教室談話の内容と関連づけることで、教科書を中心とする学習内容と児童の私的な経験が関連づけられていく形で学習内容が多様化する場合があることが示された。

第7章では、学習規律に関する1年間の学級経営過程を検討するために、組織経営論を参照し、4年生学級における1年間の授業実践記録を分析対象として、各時期の逸脱行動への教師による対応と教師の授業像の特徴を比較しながら1年間の変化を分析し、学級経営過程を検討した。4月、7月、9月、2月の各授業場面で、教師は新たな行動手続きを導入して指導を続け授業の実態を教師の授業像に近づけていたこと、新たに導入される行動手続きはその前段階よりも児童たちにとって遂行の難易度が高いものであったこと、それに伴い教師の授業像も年度初めから年度末にかけて内容が更新されさらなる学習成果の向上が目標とされていたこと、が4年生学級の1年間の学級経営過程として示された。

第Ⅴ部第8章では、以上の結果を総合的に考察し、以下4点を実践的示唆として得た。

第1に、教師－児童間の学習規律重要度認識の相違は年間を通して存在し、逸脱行動を端緒とした学習規律の学習の機会は1年間を通して潜在することである。第2に、児童の学校適応感の向上やよりよい学級風土の構築に、児童の学習規律重要度の向上が関係することである。第3に、教室談話の内容の多様化や、教師の授業像の更新も、1年間を通して起こりうるがあることである。第4に、教師が授業像を実現しようとするのが、学習規律の学習機会の創出につながる可能性があるということである。

これら4点の示唆から、逸脱行動を端緒とした学習規律の学習過程を組み込んだ学級経営過程の1つとして次の通り考えられる。教師が授業像の実現を目指すことで新たな行動手続きが導入され、新たな行動手続きに適応途上の児童の行動が逸脱行動として、教師やまわりの児童に感知される。そして、教師やまわりの児童による逸脱行動への対応が、学習規律の学習のみならず、授業像の実現に、さらには教師の授業像の更新につながる。教師が授業像を明確に持つだけでなく、その授業像を観点として実践を省察、形成的評価し、授業像を更新するとともに、児童のさらなる学習成果の向上を探究していく、という過程である。

本研究の意義として学級経営研究の創生期から続く授業中の学習規律からの逸脱行動に対する否定的な評価を転換させる方向性を示したこと、逸脱する児童からまわりの児童や教師への影響関係を示し双方向の三者関係の成立を明らかにしたこと、並立する教室談話空間を包含する状況での授業参加の新たな見方を提示したことの3点が挙げられる。これらの知見は独立しておらず、複雑な要因が絡んでいる学級経営について各要因を一体的にとらえることの重要性を本研究が示したと考えられる。

今後の課題は以下4点である。第1に、調査結果により児童をクラスタリングした分析を行い、学習規律重要度認識の特徴やその推移を再分析することである。第2に、すでに成立している以外の学習規律についての認識の特徴を分析するために、質問紙作成方法を再検討することである。第3に、三者関係をより一体的にとらえるために、本研究で扱わなかった、逸脱行動への教師の対応場面におけるまわりの児童の役割を検討することである。第4に、児童の学習規律認識や学習規律の見方と学級経営過程とをより一体的にとらえるために、研究協力を得て質問紙調査と参与観察を同学級で並行すること、また、焦点児童を設定してその児童の1年間の学習規律に関する認識や行動の変容過程を詳細に分析することである。